

視点

ようやくわかってきた 市民活動支援ということ

さいたま市市民活動サポートセンター

センター長 東 一邦



JR浦和駅東口に駅前ビルができて3年がたつ。10階建ての7階まではPARCOが入っていて、8階から10階までの3フロアがさいたま市役所の施設で「コムナーレ」と名付けられている。9階の市民活動サポートセンターは、旧市の時代からさいたま市にはなかった「市民活動支援」のための新しい施設である。管理運営についても、主に市役所が設備管理や清掃、修理などのハード面を担い、指定管理者になった市民団体が来館者対応やイベント企画などのソフト面を担うという「市民と行政の協働管理運営」という新しいやり方を採用している。

当初は、指定管理者に名乗りをあげる市民団体があるだろうかという心配もあったようだが、開設前の2007年5月の選考会には3団体がエントリーし、わたしが理事を務める特定非営利活動法人さいたまNPOセンターが指定管理者に選ばれた。

それから3年、市民活動サポートセンターには、毎日1,400人以上、1年に50万人が来館している。その間に約70回の視察見学を受け入れ、最近は同じような施設を作る計画のある自治体に招かれて、市民活動サポートセンターの運営の考え方や実情などの話をすることもある。

「市民活動支援施設の役割とは」「市民活動の意義とは」などと100年も前からわかっているような顔をして話しているが、実は、最初はこういう施設で何をすることが「市民活動の支援」なのかよくわからなかった。

1年を過ぎたころだろうか。若い主婦たちのコーラスグループが、高齢者介護のグループと仲良くなって、お年寄りたちの食事会で歌うことになった。心づくしのお弁当を前にしたお年寄りを聴衆に主婦たちの歌声が響きはじめる。すると遠慮がちに手拍子が湧き、やがていっしょに口ずさむ声が重なり、中には涙を流して聞き入るお年寄りまでいる。それまでの発表会では、友だちや親戚に頼みこんで足を運んでもらった。でもだれもそこまで感動してくれなかった。このときこのグループは自分たちにとって最高の聴衆を発見したのだ。これがきっかけで、このグループは高齢者施設や養護施設などに出向くようになり、どこでもたいへん喜ばれている。

それ以来、たとえば市民活動サポートセンターの「展示コーナー」で写真展示をするグループには、かならず「みなさんの写真をほかの市民団体のチラシやパンフレットに提供できませんか」と声をかけることにしている。「そうか、そういうふうに分たちの趣味の写真がほかの人の役に立つのか」という発見をしてもらいたいのだ。そこから、自分だけのための趣味の活動が、社会的活動、公益的な活動につながっていく。そうして、いまやお役所だけにまかせておくわけにはいなくなった「公共」を担う市民が形成されていく。市民活動の支援とはそういうことなんだと、実は最近になって確信をもちはじめたところである。